

簡單に出来る繪本應用

紙芝居の作り方

聖美幼稚園長 内山憲堂

序

紙芝居が園児たちにどんなによろこばれ、歓迎されるか云ふことは、紙芝居を幼児に試みたものでなければ解らない。今日では基督教紙芝居、幼稚園紙芝居、佛教紙芝居等各種の紙芝居が刊行されてゐる。しかし經費の點でこれ等のものを購入することが出来ないとか、更に變つたものを求められる云ふ場合は、自分で描けば理想的なもの自分で描いては、を得られるのである、けれども續心が無い場合はさうすることも出来ない。

そこで一番安價で、一番簡單に誰にでも出来る方法を紹介させて貰ふことにする。

紙芝居の起原については種々な説があるけれども、「寫し繪」のどきからくりからヒントを得て明治六年頃香

具師が小屋掛けの紙型人形芝居を始めたのが、最初らしい。勿論、この紙芝居は鉛を買ふものではなく、木戸鏝を取つて見せるもので大正十年頃までは下谷淺草の縁日に掛つてゐたことがあつた、人形も一尺四五寸から一尺以上のものを使用してゐた様である。

更に明治二十年頃に起つたものが、圓朝の弟子に通稱「新さん」云ふものが、繪をよくし、圓朝の得意とした「西遊記」や「忠臣藏」を新さんが描いて木版刷りにして一枚一枚で賣つた當時の、子供はそれを切り抜いて、竹の串をついて遊んだ。それからヒントを得て小屋者で丸山善太郎云ふ人が明治四十三年頃紙芝居を始めたのである。當時は同業者が七八名しかなかつた。大正の中頃から姿を消してゐたものが昭和に入つてぼつと姿を現はし、自轉車を

利用する様になつて、昭和四五年頃から急激な増加を示して來た。

しかし、この時期迄行はれてゐた紙芝居はすべて厚紙の表面と裏面に同じ人物が異つた動作をしてゐるところを畫いて、それを貼り合せて中央に竹串をさしたものである。紙の人形平面ではあるが、芝居をさせたからこれを紙芝居と稱したのである。

ところが昭和五年四月淺草清島町に住む永松武雄と云ふ紙芝居の繪工さんが「魔法の御殿」と云ふ紙芝居を厚紙の上に描いて繪嘶式にして話した、これが今日の平面紙芝居の始めである。この繪嘶式のもが次第に紙芝居業者の間に採用される様になつて來るに共に一人々々獨立して人形で芝居をさせた形式のものを特に「立繪」と呼ぶ様になつた。

昭和四五年頃までは立繪式のものゝ繪嘶式のものゝ半してゐるが、六年頃には殆んど繪嘶式が立繪を壓倒して仕舞つた。今日用ひてゐる紙芝居は繪を見せて話をする、繪嘶であつて、正確には紙芝居と云ふことは出來ないのであるが、紙芝居(立繪)を持つて來てゐる紙芝居屋さんが持つて

來るから同じ様に平面式のものも紙芝居と呼んでゐるのである。

繪本を應用して簡單に出來る、立繪式紙芝居と繪嘶式の紙芝居について述べることにする。

A、立繪式

一 繪本の選び方

紙芝居を作る繪本の條件としては、第一に繪本全體が一つの話の筋をなしてゐるものでなければならぬことである。即ち桃太郎なら桃太郎の話を全面に描き出したものでなければならぬ、お婆さんが桃を拾つて來るところから始まつて、生れるところ、出征のところ、犬猿雄の家來になるところ、鬼を退治するところ、凱旋するところと云つた様に話の各場面の長はされてゐるものであること。

第二には、どの場面に於てもなるべく人物が獨立してゐるものであることが必要で、なるべく人の繪が物の陰になつてゐたり、人物が重なり合つてゐたりしないものがない。

第三には構圖と色彩のよいものである。上手に描かれた繪、あくどくない色彩であることが必要な條件とされる。二

度か三度の石版刷りでほんき原色の様なひざい色を用いた様なものがあるが、あれは子供のためによくない。

第四はなる可く紙質の厚いものであることである。立繪の場合には裏打ちをせず二枚を裏表に貼りつけるのであるからあまり薄いものでは立たないことがある。

二 人形の取り方

立繪の人形は各場面に應じた人形数が必要である、この點は人形劇等と異なつてゐるので、人形劇に於ては一個の人形が出現してあらゆる動作を正すのであるが、表裏に描かれた人形に於ては二つの動作しか爲し得ないのである。

「舌切雀」を例に採るならば人形劇に於ては、お爺さんとお婆さんご雀ごお化けさへあれば全場面の演出に事缺かないのであるが、紙芝居に於ては

第一場面	お爺さんが雀を可愛がつてぬ	お爺さん(イ)
第二場面	お婆さんが舌を切るところ	お婆さん(ロ)
第三場面	お爺さんが歸つて来たところ	お爺さん(ハ)
		お婆さん(ハ)
		逃げる雀

第二幕

第一場面	お爺さんが訪れて行くところ	杖を持つたお爺さん
第二場面	雀のおどるところ	出迎へる雀(ハ)
第三場面	葛籠を貰つて行くところ	坐つたお爺さん
		踊る雀
		葛籠を負つたお爺さん
		見送る雀(ハ)

第三幕

第一場面	大きい葛籠を負つて歸るところ	葛籠を負つたお婆さん
第二場面	お化けの出るところ	見送る雀(ハ)
		おどろいたお婆さん
		お化け

以上八つの場面を挙げたのであるが、その人物は十六になる。大抵の繪本は十六頁即ち八つの場面の繪から成り立つてゐるから以上の如き人物を作ることは容易である。これを劇に演ずる時には三幕となるのである。

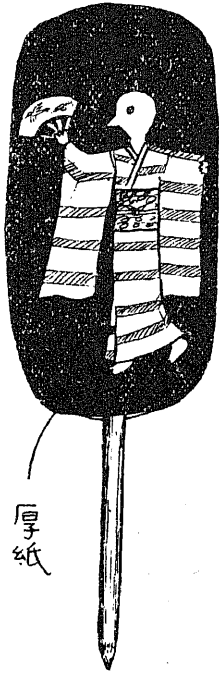
しかし、人形が場面によつて二度に用ひられることもあるから實際は十六も要さないこともなる、即ち、第一幕では第一場の(イ)と第三場面の(ロ)が共同に用ひられ、第二場面の(ロ)と第三場面の(ハ)が共同に用ひられ、第二幕、第三幕に於ける雀(ハ)、(ハ)が同じものを用ひて差支へ

ないから十三本人形を作ればこの芝居は演出できることになる。

三 人形の作り方

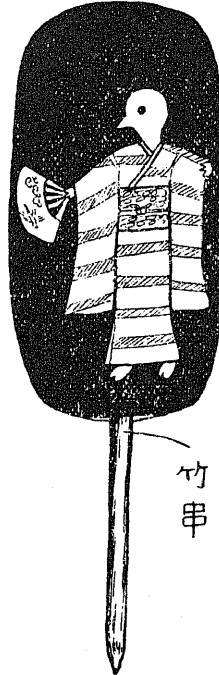
先づ同じ繪本を二冊買つて来る、そして、芝居が出来ただけの人物を選定して、兩方の本から同じ人物を切り取つて来る。これを表裏に貼り合せて中心に竹串を差せばいゝの

表面



厚紙

裏面



竹串

であるが、これだけでは裏表をひっくり返しても何等の動作をしないから一方の繪の手なり首なり足なりを切り取つて少し上下又は左右に移動させて糊で貼りつけるのである

例へば上の圖に於て一方は扇子をあげてゐるころで一方は下げてるころであるが、原畫に於ては兩方共「表面」の如き構圖であつたのを扇子のころを切り取つて下向けに貼りつけたのである。足も同様原畫では「裏面」の様に下にあつたのを切り取つて後方へ持つて來たのである。

出來上つて糊が乾いたら、人物だけを殘して墨で塗りつぶして仕舞ふ。これで一人物が完全に出來上つた。

竹串は紙の中へ入るころは扁平にして置き方は丸味を持たせる、そして先の方は尖がらして置く。(これは藁たばの中へ差すためである)竹串の長さは繪から下三寸から四寸位でよい。なるべく太い方が演出に便利である。

猶、附言してセットの作り方を述べて置く。セッ

トは前部前方へ小さなものを用ひるか兩脇へ立てるより仕方がない。後方は黒一色で行かなければならないからである。

そこでセットも人形芝居と同じ様に竹串を作つて置いて、下の「藁たば」へ差すこゝが出来るやうにして置くこゝ取り扱ひが自由になつて都合がいゝ。

四 舞臺の作り方

立繪の紙芝居には人形芝居的な舞臺を必要とするのである——この意味に於て立繪の紙芝居は人形芝居の一種である。先づ普通の繪本から採つた幼稚園で演ぜられる手頃の舞臺の寸法を示せば

舞臺面 間口 二尺から二尺五寸、高さ一尺から一尺五寸

袖(左右共) 五寸から六寸位

天 五寸位(幕をつけるとして)

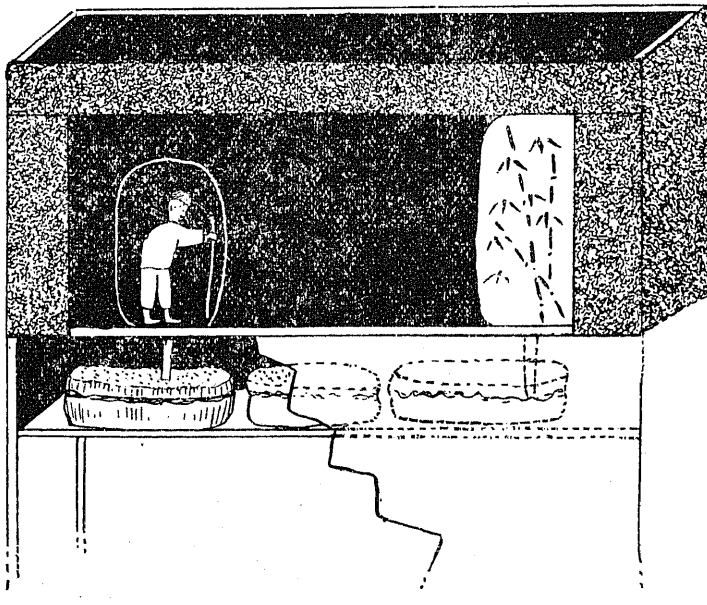
舞臺面の高さ 三尺二三寸

舞臺面より五六寸下のところに幅三四

寸の棚をつける。

奥行 一尺から一尺五寸

舞臺は一寸角位の細割で作ればよい、これで骨組みが出



物の向きに氣をつけて、後向きに歩かせないこゝである。

B 繪噺式

一 畫面の作り方

繪本の選擇は立繪の場合も同じである。同じ繪本を二冊買つて來て、それをバラ／＼にして仕舞ふ、そして△の繪本で第一頁と第二頁によつて一場面を作る、即ち厚紙の上にも兩頁をつぎ合せて貼りつければよい。第二場面はBの繪本で三頁と四頁で作る、第三場面は△の繪本で五頁と六頁まで作る。かくして製作して行けば二冊の繪本で完全に全場面數だけの平面紙芝居が出來上るこゝになる。

二 舞臺の作り方

舞臺はたゞ差入れが出來るだけのこゝであるから極めて簡單である。菓子折りの裏へ額縁の様な板を張りつけて左右から繪が入る様に切り取れば出來上る。廢物利用である。繪本拾五錢として貳冊で參拾錢、菓子折を利用すれば參拾錢で園兒のよろこぶ紙芝居が一二時間で出來上るのである。

三 話し方

來上つた譯である。さて骨組みが出來上つたり、今度はそれに布を張る。後方のバック及び舞臺内面の左右は黒の木綿を上から下の棚のこゝろ位まで張る。天及び袖それから前方と右左へは少し厚手な布又は木綿に裏打ちをしたものを張る。色はなるべく落ちついた上品な色がよい。これがあまりけば、いゝ人形が引き立たなくなる。

幕は上から下へたらず綴帳式のものがいゝ。人形芝居には左右からの引き幕は適さない云ふこゝは勿論である。

前へ張る布は薄いものでは遣つてゐるのがすいて見えるからいけない。大體の出來上りは前の圖の如きものになる。

棚の上に置く「藁たば」は三個でも四個でも、又は一個にまゝめてもいゝ。竹串が自由にさして置ける様に柔かに巻いてあるものであればよい。

五 談出法

人物を左右から出しながら科白をやる。一人で二つの人物が使へる。その上必要でない人物、(家來ミか、動く必要のない時)は藁の上に差して置きさへすれば一人で四人や五人の人物を遣ふこゝが出來る。たゞ注意するこゝは、常に人

イ、舞臺の位置

舞臺の後に壁か戸がある方がよい。その三四尺前に立つ。舞臺ミ子供ミの距離は子供の數に比例するが五六十名の幼児ミして四五尺のミころがよい。高さは三尺位のものゝ上に舞臺がのること。

ロ、話者の位置

話をする人は、繪を抜く方の側へ立つこと、即ち右から抜く様になつてゐれば右側へ立つ、左からの場合は左側へ立つ。話者は常に正面を向けてゐる様にすべきである。

ハ、話の筋ミ場面ミを會得して置くこと

先づ話の筋ミ場面ミを充分にのみ込んでゐて、話の切れ目、繪の變り目が自由に話ミ繪ミの調和がされること。

ニ、話は平均に

或る場面は非常に短かく、ある場面は非常に長いといふのはいけない、大體各場面の話しの分量が平均してゐるこゝが必要である。

ホ、話者の態度

話す場合は子供の顔を見ながら、時々必要に応じて繪を

見て話す。二十人三十人位の場合は椅子に腰をかけて話す方が落ちついてよい。ゼスチュアールは、不必要である。繪がすべてを物語つてくれてゐる。子供たちは繪を見るこゝによつて情景を頭に描き出してゐるのである。もしゼスチュアールを用ふれば、子供には二重の注意を拂はねばならないこゝになる。故に童話の如くゼスチュアールは要らない。

ヘ、話の仕方

話は活辯式にならない様、童話の大衆型にならない様、一人一人の子供に話す氣持ちで自然に話すのである。

四 繪の扱ひ方

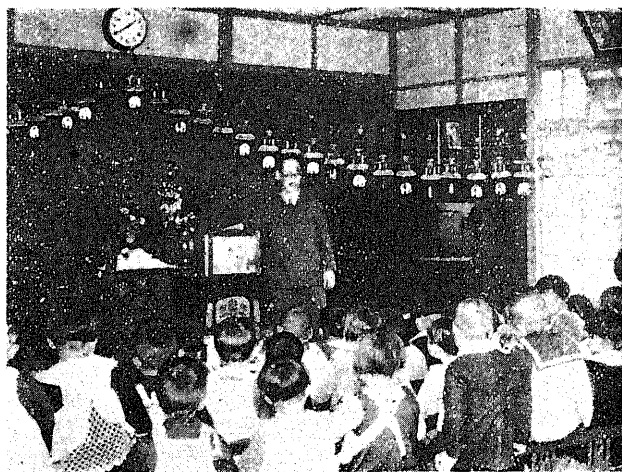
イ、順序を調べて置くこと

話してゐる途中で繪がちがつてゐて差し替へをする様なこゝがあつたら、その紙芝居はもう失敗である。

紙芝居を舞臺へ入れる前に、豫め順序を揃へて置くこゝが必要である。

ロ、話ミ一致すること

話の變り目ミ繪ミが一致すること、故によくのみ込んで



置いて前の繪が終る少し前に靜かに指を入れて次の繪を出す準備をして、話に應じて、直ちに變化をする場面、勇し

その方へ氣をこられて話の方が留守になることがある。
 (寫眞は菓子折の舞臺で話してゐるところ)

結

與へられた紙數に制限があるから充分に理解して貰ふまでに書くこゝが出来なかつたが、大體「繪本利用の紙芝居」について述べさせて貰つた。保育の實際に於て遊戯、手技、唱歌、談話、觀察を規則的に與へて満足しないで、益々多角的にし、自由に各種各様のものを與へ、幼児のよろこびを伸ばしてやるこゝを考へなければならぬ。すべてのものが、あり合せのもので自由に幼児のものにするこゝが出来るのである。こゝにはたゞその小さな見本の一つを示したにすぎない。

餅くふみにぎり箸して卓に寄る

この子よき子なりにけるかも

元且

い場面等は早く、靜かな場面は緩かに抜く。

ハ、抜いた繪

抜き終つた繪は、一々後方へ差さないで、後のテーブルの上にそのまゝ重ねて置いて置く。差すこゝによつて、